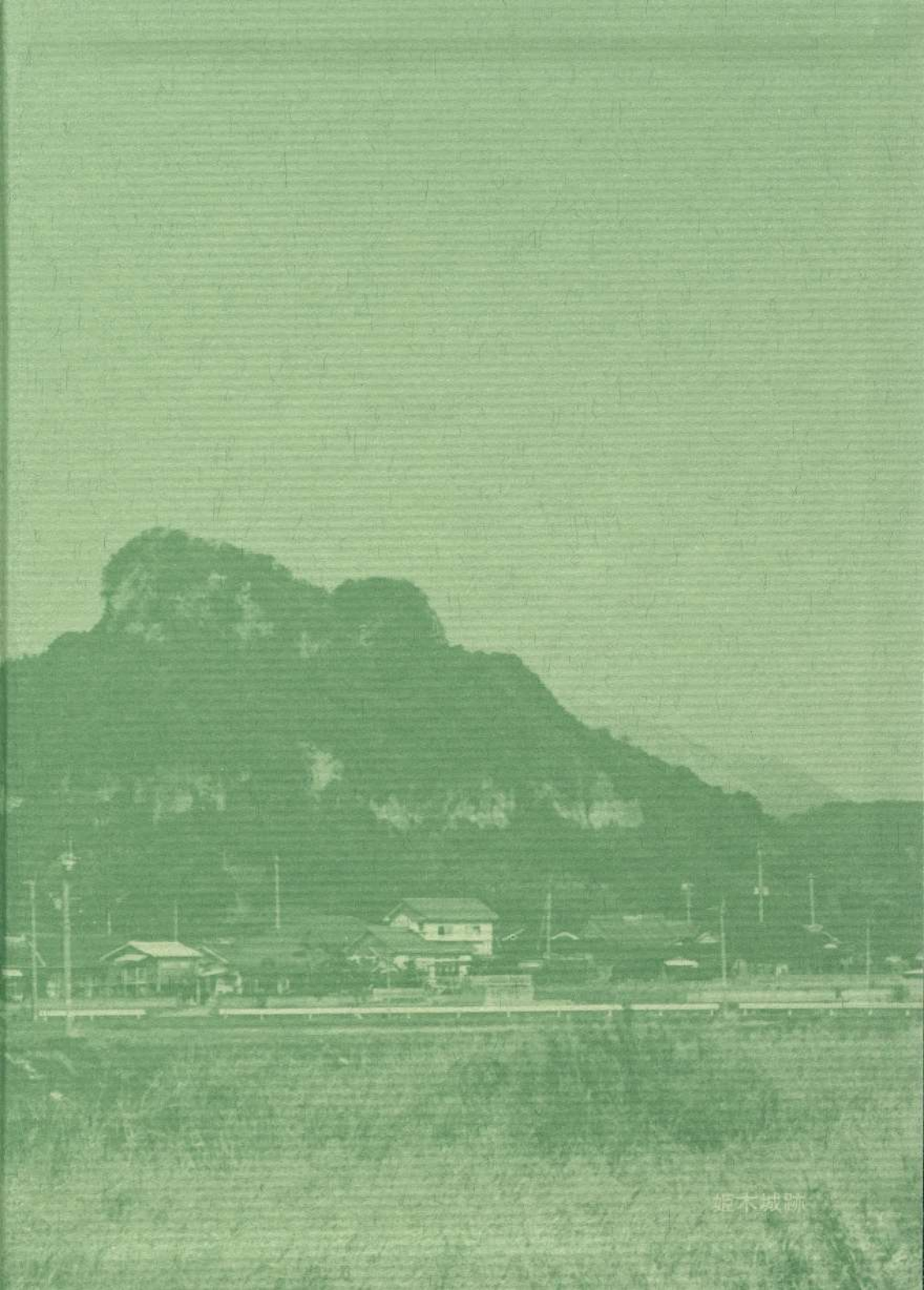






姫木城跡



國分郷土誌

上卷



城山上空から望んだ国分市街地

市民憲章

一、わたしたち国分市民は

みんな希望にもえながら

明るく平和なまちをきずきます

一、わたしたち国分市民は

みんなまじめにはたらいて

伸びゆく豊かなまちをきずきます

一、わたしたち国分市民は

みんな力をだしあつて

美しくすこやかなまちをきずきます

一、わたしたち国分市民は

みんな家庭づくりにいそしんで

楽しくしあわせなまちをきずきます

一、わたしたち国分市民は

みんな秩序をよく守り

正しく住みよいまちをきずきます

外わくの○は国分の「国」をあらわし、平和の象徴。

▲は「花は霧島、煙草は国分、燃えてあがるはオハラハア桜島」の霧島山と桜島の両山をかたどり、同時に国分の「分」をあらわしています。

昭和30年2月1日制定



市 章
city Enblem



市の木 クロガネモチ（昭和47年10月14日制定）



市の花 コスモス（平成7年2月1日制定） 市の花 ハナタバコ（平成7年2月1日制定）

国 分 市 歌 浜 田 盛 秀 作詞
武 田 恵喜秀 作曲

あ さ か ぜ そ よ ぐ こー くーぶ の に
か お る た ば こ や あ おーば な み
ひ の し ま や ま を み は る か し
わ か き う た こ え に じー を よ ぶ
み ん な み の ま ど あ あ こ く ぶ

(三)

(二)

(一)

朝風そよぐ国分野に
かおるたばこや青葉波
火の島山を見はるかし
若き歌声 虹をよぶ
南の窓 ああ国分

ひとつ心に 打つ槌ぞ
躍進の音ひびきあい
みどりの牧場また工場
輝く明日の栄えをよぶ
南の窓 ああ国分

桜花咲く 城跡や
古きつたえの国分寺
誇りも高きいしずえに
見よ限りなき夢のする
南の窓 ああ国分



大隅国分寺跡（大正10年3月3日国指定文化財）



宝 塔（昭和49年6月1日市指定文化財）



環頭大刀（亀の甲遺跡）
（昭和58年8月15日市指定文化財）



平瓶（亀の甲遺跡）



大隅国分寺軒丸瓦



台明寺僧墓



舞鶴城跡

慈恩寺跡から発掘された石仏



不動明王 覚遍作（一七二四年）（田中重博氏所蔵）

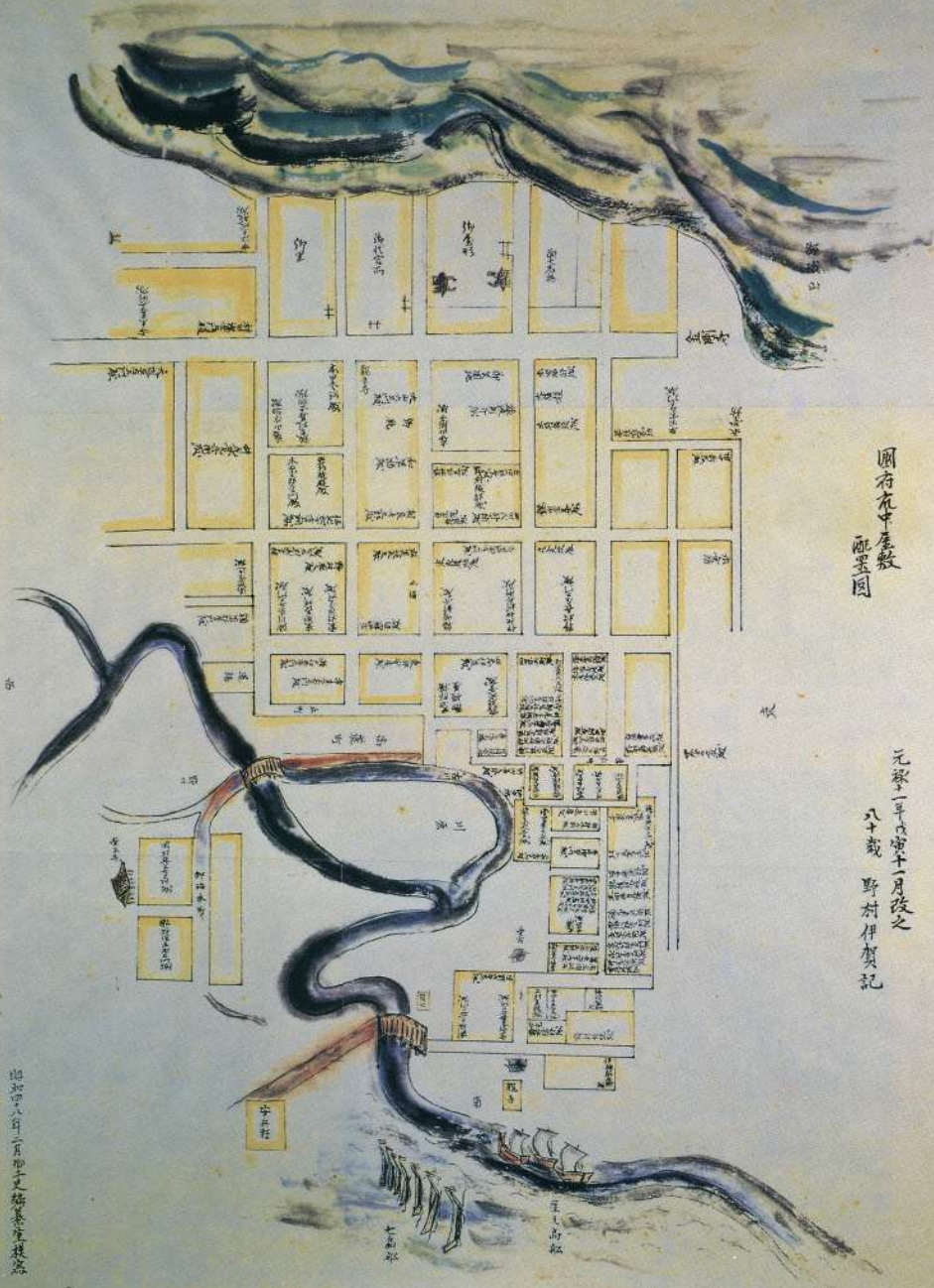


西郷隆盛肖像画 服部英龍作（国分市郷土館所蔵）



國府在中之屋敷
御菜園

元禄十一年丙寅十一月改之
八十歳 野村伊賀記



此図は元禄十一年丙寅十一月改之
八十歳 野村伊賀記

国府の古地図 元禄11年(1698年) (野村伊賀氏所蔵)

発刊のことば



国分市長 谷 口 義 一

わたしたちのまち「国分市」は、町村合併促進法の制定施行を機に、昭和二十九年四月に東襲山村、清水村、国分町が合併し、同年五月には東国分村、敷根村が二次合併して「国分町」が発足しましたが、翌年の三十年二月一日に市制施行をいたしました。

ご承知のように、昭和四十八年に発刊の前郷土誌は、発刊以来市民をはじめ多くの方々に広くご高覧をいただいてまいりましたが、今回、市制四十周年を迎え、その記念事業の一つとして、平成五年から新郷土誌編纂に着手いたしました。

編纂に当たりましては前郷土誌の見直しを行い、既存資料の再検討に加えて新たな資料発掘に努め、文献等の新しい史実に基づき内容の充実を図ると共に、発刊以後二十年余りの記録を追加しての全面改訂となりました。

国分地域は特に近年、新しい遺跡の発掘やハヤト文化の再認識など歴史的注目を浴びております。この

ような時期に、編纂計画の一部ではありますが、このほど上巻と資料編が発刊の運びと成りました。

この郷土誌は上巻で古代から終戦までの記録と自然編を収録し、資料編で古文書、石造物調査資料、発掘調査資料等をまとめてあります。また、国分の天保の絵図や古地図など、所蔵する機関のご協力により、今まで一般の方には眼に触れる機会の少なかった貴重な資料を、付図として添付することができました。

終わりに、限られた期間にもかかわらず、専門的な分野のご執筆やご指導を賜りました五味先生をはじめ各ご専門の先生方に厚くお礼申し上げます。

なお、調査執筆と日夜ご尽力くださいました編纂専門委員の方々、現地調査等でご協力いただきました編纂協力委員の方々、さらに貴重な資料や情報を提供してくださいました多くの皆様に心から感謝の意を表します。残されている下巻の発刊にも引き続きご協力くださいますようお願い申し上げます。

この郷土誌が、歴史と伝統の上に立って、さらなる飛躍を目指している国分市の発展の糧となることを念じて発刊のことばといたします。

平成九年三月

発刊にあたって



国分市教育長
国分郷土誌編集委員長 立山 巖

国分市は、市制四十周年記念事業の一環として郷土誌を発刊することになり、平成五年から着手してまいりました。

編集にあたっては、本市の自然、風土の特質や、原始古代から現代に至るまでの国分の歴史にふれ、郷土をより深く理解することによって市民の郷土の歴史に対する関心を高め、現代の郷土の姿を知り、「自然と産業と人」とが調和した「田園文化都市」の建設に寄与していただくことをねらいとしました。さらにあわせて国分地方の文化的遺産や貴重な資料等を後世へ伝え残すことに努力したいと考えております。編集事業への市民参加をお願いし、多くの市民の方からご協力をいただくべく努力してまいりました。

ところで国分市は、過去に昭和三十五年と昭和四十八年に「郷土誌」を発刊しております。今回の編集にあたっては、当初昭和四十八年以降の資料に基づき若干の加筆や訂正を計画しましたが、検討していくうちに、全面的な書き替えが必要であるとのことで、全面改訂にしました。昭和四十八年に発刊された国

分郷土誌は、増刷を含めて二五〇〇部印刷されましたが、十年くらい前から品切れとなり、その後は多数の購入希望者にご迷惑をおかけしました。また、B5判で一〇〇〇頁の大きさでしたが、分厚過ぎて重たく持ち運びに不便であるとの意見もありましたので、今回はA5判としてやや小さくし、三分冊（上巻・下巻・資料編）とし、読者の方々の意向も配慮しました。

多くの方々のご協力により、貴重な資料を得られましたが、焼却や家の建て直しなどで失われた資料も多く、また世代交代による古文書の市外散在などにより所在不明になったり、散逸した資料も数多くあると思われることが悔やまれます。しかしまだまだ文献、古文書、資料等が眠っているものと思われれます。

これらについては後世の研究に委ねて、現在わかっている範囲内で執筆を進めてまいりました。

執筆については、地元の編纂専門委員を主にし、一部を専門の先生方をお願いしました。

終戦までの「上巻」と終戦以後の「下巻」、それに「資料編」の三巻を計画し、先ず「上巻」と「資料編」を発刊後、「下巻」はやや遅れて発刊します。

「資料編」には、貴重な古文書や、市内に現存する多数の石塔の写真・碑文・イラストそして重要な発掘調査結果等について編集しました。

主に終戦以後のことについて編集される「下巻」も、現在鋭意執筆編集中です。

私たちの郷土「国分」は、多くの先人たちが長い年月の間宮々と努力し、一步一步着実に今日の文化を築き上げてまいりました。

最近全国的に郷土の歴史についての関心が高まっております。ふるさと国分を知る手掛かりとして、この郷土誌を役立てていただければと思います。

本誌の編纂にあたり、ご尽力いただいた総監修の五味克夫先生をはじめとして、執筆に携われた諸先生方、協力員の先生方、資料の収集・調査・提供にご協力いただいた調査員や市内外の方々、第一法規出版（株）の方に厚くお礼を申し上げます。

平成九年三月

監修のことば



鹿児島女子大学教授 五味 克夫

地理的にも政治的にも大隅国の中心部に位置して長い歴史を経てきた国分市は近年、先端技術産業の育成地としてさまざまな施設が建設され、近代都市として急激に変貌をとげつつある。その国分市で市制四十周年を記念して国分郷土誌を再刊することになったため、意見を聞きたいということで平成五年秋の一日編纂委員の方々数名が来訪された。私の現勤務校が鹿児島神宮背後の山丘上にあつて国分市域に接しており、通勤圏でもあることから、日頃地域史研究の重要性を説いている者の義務感が作用して簡単に監修の役を引き受けてしまった。しかし、いざ仕事が具体的にはじまってみると、これは容易ならぬ大事であると感じ、任の重さに恟々の日々を送る仕儀となった。実は前郷土誌の巻末にも二十余年前、私の臆面もなく語った郷土誌編纂の心得が載せられているが、それがただ役立ったか否か忸怩たる思いがするのである。しかしその考え方は大むね今に於いてもかわってはいないし、その旨を委員の方々にもお伝えした次第である。

今回の執筆者もすべて入れ代わっていたが、資料編や特別な専門分野を除いてはほとんど地元在住あるいは所縁の方々に委嘱してあり、前郷土誌の見直しや補足については編集委員会と協議、項目立てをすませたということであり、いわば地元手作りの改訂版を作成しようということのようであった。私もその趣旨を了承の上、若干の助言、注文をつけさせていただき、やはり地元の方々に郷土の歴史と実態を理解してもらうことを第一とはするものの、歴史資料としても活用でき、他地域の人々の理解も得やすいような内容をと要望したものであった。

平成七年九月以降、原稿を逐次拝見、気づいた点、不足点については率直に意見を申しのべ、加除訂正をお願いしてきた。平成八年八月中に一通り別冊資料編の他、第一編「国分の自然・人口」から、第五編「近代の国分」に至るまでを覧終わり、内容は豊富で、各執筆者の個性がそれぞれにあらわれているなど感じた。資料を掲げ極力具体的にわかりやすくという要請にこたえていただいたが、不明の点はなお多く、それらはあるままを記し論断はつとめてさけていただくようお願いした。しかし種々の都合で筆の及ばぬ箇所も少なくないようであった。最近発掘調査により全国的に話題にのぼっている、縄文時代早期の上野原遺跡等については、県埋蔵文化財センターの新東晃一氏の紹介を得たが、国府、国分寺の発掘調査についてはとてもまだ十分とはいえないし、中世山城の本格的調査もほとんど未着手の状態にあるわけで、それらは何れも今後の課題として残されることになった。台明寺文書の分析による古代より中世への田地の推移、領有関係の変遷や、隣町ではあるが関係の深い現在発掘調査中の隼人塚、並びに近年注目されつつある正八幡宮執印行賢の事績、それらとの関連による国分寺、国府の位置づけの再検討、また近世島津氏の支配確立過程における島津義久の存在の重さ、その居所としての当地の重要性、その後にもみ

られる特別な取扱い等々、なお明らかにすべき問題で将来に残されたものも少なくない。歴史の解明には時間がかかるのである。それらは将来の調査研究に託して、ひとまず、現段階におけるまとめということで本誌は集成されたことになろう。

また時代区分、史料引用、注記の付し方等々において、執筆期間、執筆者の交代等の諸事情によってやや不整一の箇所もみられないではないが、要はできるだけ具体的な記述、諸資料をより多くもりこむことが、今後いよいよ発展変遷を展開するであろう国分の歴史の現段階における集約整理としては妥当ではないかと考え、あえてむりな整合はさしひかえたこともおこわりしておきたい。

閱了に当たって編纂委員、執筆者、事務局の方々それぞれの持味を生かした懸命のご努力に対して敬意を表し、にもかかわらず幾つかの問題点を残したことについては監修者の非力も一因と考え、率直にお詫び申し上げておきたい。

十数年前、私は薩摩国国府の所在地である『川内市史』の監修をつとめたことがある。今回は、はからずも大隅国国府所在地たる『国分郷土誌』監修のつとめも併せて不十分ながらはたすことができた。まことに感慨深い。

平成九年三月

凡 例

- 一、本誌は『国分郷土誌』（上巻・下巻・資料編の全三巻）のうちの上巻である。
 - 一、本誌の内容は、第一編「国分の自然・人口」、第二編「原始・古代の国分」、第三編「中世の国分」、第四編「近世の国分」第五編「近代の国分」の五編構成とし、巻末に年表を付した。
 - 一、本誌は、時代の下限を太平洋戦争終結までとし、可能な限り広く資料収集して記述した。
 - 一、史実の記録は、客観的であることを重視し、出典・根拠を明らかにした。
 - 一、本文は平易な口語体とし、高校生が理解できるように努めた。
 - 一、記述は常用漢字と現代仮名遣いを原則とし、誤読のおそれのある漢字や専門用語にはルビ（振り仮名）を付し、方言の読みについては（ ）で示した。
 - 一、専門用語については、解説を補説として入れた。
 - 一、引用文・補説・囲み記事は文字を小さくし、一字下げとした。
 - 一、人名については、原則として敬称を省略した。
 - 一、地名については、原則としてその時代に用いられた表現に従った。
 - 一、年号は原則として和暦を用い、適宜西暦を（ ）内に入れた。
 - 一、計量単位は原則としてメートル法によったが、ところによっては尺貫法を用いた。
 - 一、不適切な表現を用いないように、細心の注意を払った。
- しかし、歴史的用語などのため止むを得ず差別用語を用いた部分があるが、これは差別解消の視点に立つて、封建社会や歴史的身分制度を認識する意味でそのまま収載したものである。
- 一、昭和四十八年刊行の国分郷土誌を『前国分郷土誌』とし、昭和三十五年刊行の国分郷土誌を『旧国分郷土誌』とし、

誌』とした。

一、古文書等の引用文献については、原則として原文のままとし、不明の箇所等は（ママ）・カ・□□とした。

国分郷土誌上巻／目次

発刊のことば

発刊にあたって

監修のことば

凡 例

国分市長 谷口義一

国分市教育長 立山 巖

国分郷土誌編纂委員長 鹿児島女子大学教授 五味克夫

第一編 国分の自然・人口

第一章 自然と風土

第一節 位置と面積

第二節 地 形

一 地形の概要

二 カルデラ

三 台 地

四 平野と河川

第三節 地 質

一 地質の概要

一

三

三

七

七

八

九

一一

一二

一二

二 地質構造	一五
三 地質各論	一六
(一) 四万十累層群	一六
(二) 国分層群	一八
(三) 第四紀の安山岩類	二一
(四) 先始良カルデラ火山噴出物	二三
(五) 始良カルデラ火山噴出物	二九
(六) 始良層	四四
(七) 新期火山噴出物	四六
(八) 沖積層	五一
第四節 氣象	五二
一 概説	五二
二 気温・降水量	五四
高地と低地 気温と降水量	
第五節 自然災害	五七
一 自然災害の背景	五七
素因 誘因	
二 自然災害史概要	五八
台風災害 豪雨災害 火山災害	
三 平成五年夏災害	六二

全体概要 災害事例

警戒避難による被害の軽減

第六節 生 物 七一

一 植 物 七一

人里の植物 帰化植物 薬用植物

野山の樹木 生け垣の植物 庭木の植物

街路樹 山の植物 水辺の植物

海浜の植物 数少ない植物

二 鳥 類 八二

野鳥の分類 国分で観察される野鳥

野鳥の観察

三 昆虫（蝶・トンボ） 八七

蝶 類 トンボ類

四 水生生物 九八

天降川・検校川の水生生物

下井・敷根海岸の干潟の水生生物

第二章 人口と集落 一一

第一節 人口と世帯数の変遷 一一

第二節 地域別人口 一二

第三節 集落の推移 一四

第四節	大字・小字	一一五
-----	-------	-----

第二編	原始・古代の国分	一五三
-----	----------	-----

第一章	国分のあけぼの	一五五
-----	---------	-----

第一節	旧石器時代のようにす	一五五
-----	------------	-----

人類の誕生と発達	太古の火山活動	南九州の旧石器文化
----------	---------	-----------

第二節	旧石器時代の国分	一五九
-----	----------	-----

第二章	縄文時代	一六一
-----	------	-----

第一節	縄文時代のようにす	一六一
-----	-----------	-----

縄文時代と縄文文化	南九州の縄文時代	南九州の火山活動
-----------	----------	----------

国分平野の海岸線	南九州の縄文文化の変遷
----------	-------------

第二節	土器・遺跡	一七一
-----	-------	-----

平杵式土器	上野原遺跡
-------	-------

縄文早期の遺跡	縄文後期の遺跡
---------	---------

第三章	弥生時代	一七七
-----	------	-----

第一節	弥生時代のようにす	一七七
-----	-----------	-----

第二節	弥生時代の国分	一七八
-----	---------	-----

第四章	熊襲・隼人の時代	一八一
-----	----------	-----

第一節	古墳・飛鳥時代のようにす	一八一
-----	--------------	-----

古墳時代のようす 飛鳥時代のようす

南九州の古墳時代 古墳時代の国分

第二節 熊襲 一八五

熊襲と隼人 熊襲とは

第三節 隼人 一八七

大和朝廷の南九州進出

第四節 熊襲伝説 一八九

一 記紀にてくる熊襲征伐 一八九

景行天皇の熊襲征伐

小碓命の熊襲征伐

二 歴史教科書の中の熊襲征伐 一九〇

明治の歴史教科書

戦前の歴史教育

三 熊襲伝説の郷土史料 一九二

『三国名勝図会』の熊襲伝説

熊襲伝説を伝える神社

第五章 奈良時代 一九四

第一節 奈良時代のようす 一九四

第二節 大隅国の建国 一九五

大隅国の設置 大隅国府府中説

大隅国府真孝説 桑原郡八郷

第三節 大隅国の国司 二〇〇

地方政治の役人 大隅国の国司

第四節 隼人の反乱 二二〇

大隅国守の殺害 朝廷軍の隼人征伐

隼人の応戦 隼人の築いた七か所の城

比売乃城と曾於乃石城 二つの隼人塚

凶土塚 反乱の終末

第五節 亀ノ甲遺跡 二二九

亀ノ甲遺跡のなぞ 遺跡の周辺

遺跡調査の概要 出土品の調査と現状

亀ノ甲遺跡付近の出土品

出土品の検討 遺跡の主はだれか

第六章 平安時代 二二九

第一節 平安時代のように 二二九

平安遷都 政治・社会の動き

国分のように

第二節 大隅国分寺・尼寺 二三二

一 国分寺建立のはじまり 二三二

大隅国分寺の創建はいつか

大隅国分寺創建の再検討

二 大隅国分寺・尼寺はどこに 二三六

大隅国分寺の所在地 大隅国分尼寺はどこに

大隅国分尼寺の新候補地

三 大隅国分寺の遺跡 二四三

国分寺瓦 石造六重層塔

四 大隅国分寺の消長 二四七

平安末期の大隅国分寺 室町時代の大隅国分寺

江戸時代の大隅国分寺

第三節 古代の官道 二五〇

古代の交通制度、駅制

大隅国府へ至る官道と駅

蒲生駅

第四節 大隅国の班田制 二五二

班田制とは 大隅国の班田制

実施できなかった班田制

大隅・薩摩国班田制実施

条里制とは 大隅国の条里制

第五節 大隅国の古代社寺 二五六

一 延喜式にみる神社 二五六

鹿兒島神社 大穴持神社 韓国宇豆峰神社 宮浦神社

二 その他の社寺 二五八

止上神社 台明寺

国分地方の経塚

第三編 中世の国分 二六三

第一章 鎌倉時代 二六五

第一節 鎌倉時代のように 二六五

第二節 島津氏の入国 二六六

惟宗忠久島津荘へ 大隅国の守護・地頭

島津忠久の薩摩への下向

第三節 島津荘 二七〇

薩摩・大隅の荘園 島津荘

第四節 大隅国建久図田帳 二七三

太田文（図田帳） 大隅国の建久図田帳

大隅国の田数の特徴

第五節 大隅の在地豪族・御家人 二八二

曾野郡と小河院の豪族

酒井氏 建部氏

第六節	大隅国御家人交名	二八五
-----	----------	-----

第七節	税所氏	二八六
-----	-----	-----

税所氏の出自	税所氏の所職・所領
--------	-----------

止上神社記

第八節	元寇	二九二
-----	----	-----

文永の役	異国警固番役
------	--------

石築地役	大隅国石築地役配符
------	-----------

弘安の役	元寇のその後
------	--------

第二章	南北朝時代	二九九
-----	-------	-----

第一節	建武の新政と南北朝時代の様子	二九九
-----	----------------	-----

第二節	建武の新政と国分	三〇一
-----	----------	-----

島津貞久、日向・大隅国の守護に

大隅国台明寺への雑訴決断所牒

第三節	国分地方の争乱	三〇三
-----	---------	-----

橘木城・鼻連山の攻防	三州の地は三つ巴の争乱の場
------------	---------------

宮方・武家方の恩賞合戦	島津・畠山軍の攻防
-------------	-----------

姫木城・清水城の戦い

第四節	本田氏	三一〇
-----	-----	-----

本田氏の出自	本田重親と蓑原の戦い
--------	------------

総州家・奥州家の対立と本田忠親の叛

第三章 室町時代

第一節 室町時代のようす

第二節 戦国時代の争乱と国分

国久・季久、清水などを攻む

島津忠廉、上井城を攻む

曾於郡城の攻防

春山原の戦い 生別府城の攻防

岩剣城の戦い 黒川崎の戦い

廻城の戦いと島津忠将 肝付氏、小村を襲う

島津氏の三州征庄と肥後合戦

秀吉の征西と島津側の動き

第三節 税所氏のその後

文安・文明のころの税所氏

第四節 本田氏のその後

本田家の内紛と曾於郡城の戦い

本田董親、正八幡宮を焼く

本田董親、庄内へ逃れる

本田氏のその後 本田氏の系図

島津藩主と本田氏家老職

第五節 ザビエルの国分清水来訪説

ザビエルの鹿児島上陸

三二四

三二四

三二六

三二四

三二五

三三一

貴久とザビエルの一回目の会見地

青山玄氏の国分清水来訪説

芳即正氏の国分清水来訪説

第六節 農民の姿	三三五
----------	-----

大隅地方の農民の姿

うは太郎わらわの証文

国分の田地に関する古文書

麦作を払い苗代を踏みしだく

卯に出て戌に入れよ

第七節 中世国分の文化	三四二
-------------	-----

歌に詠まれた国分

一遍上人遊行の地

国分の地の武家文化

上井覚兼の日記

第四編 近世の国分	三五一
-----------	-----

第一章 織豊時代	三五三
----------	-----

第一節 織豊時代のようにす	三五三
---------------	-----

薩摩藩のようにす

第二節 文禄（太閤）検地	三五四
--------------	-----

文禄（太閤）検地 石田三成の知行地

第三節 庄内の乱 三六一

乱の原因 乱の経過

庄内の乱と国分

平田三五郎と吉田大蔵

第二章 江戸時代 三六六

第一節 江戸時代のようす 三六六

薩摩藩の動き

第二節 島津義久と舞鶴城 三六八

義久、舞鶴城へ 館造りの舞鶴城

城下町国分 義久死後の国分

第三節 琉球入り 三七四

薩・琉の関係 琉球出兵 琉球の統治

第四節 薩摩藩の地方制度 三八〇

一 外城制度 三八〇

外城制度のあらまし

外城の行政組織とその職務

二 郷士制度 三八五

郷士の身分と任務 郷士の生活と経済基盤

三 国分地方の外城 三八七

外城と麓 各郷の地頭名など

地頭仮屋とその絵図

古文書に見る国分郷士の実態

郷士の文武の鍛練

第五節 国分の検地	四〇三
-----------	-----

薩摩藩の検地 国分の検地 検地の手順

第六節 門割制度と農民の生活	四三二
----------------	-----

一 門割制度	四三二
--------	-----

門割制度のあらまし 門の組織 検地と門割

浮免地 門の義務 国分郷の御囲籾米

郷村の石高と戸口 各村の門 賦課額の減免

二 農民の生活	四三七
---------	-----

農民の「休み日」

粗末な衣食住 屋敷構え

第七節 野町と浦	四四四
----------	-----

野町 浦 浦町 小村浦

第八節 交通	四五〇
--------	-----

陸上交通 海上交通 文政六年の「道帳」

第三章 産業と開発	四六七
-----------	-----

第一節 農業の推移	四六七
-----------	-----

一 農政のあらまし	四六七
薩摩藩の農政 農政機構	
天保財政改革と農業	
二 国分の農業	四七〇
米作 下代蔵国分與 麦作 大豆	
さつまいも 上木高の租税	
第二節 林業の推移	四七六
一 近世の林政	四七六
二 薩摩藩の林業	四七七
林野の種類 林野の利用	
三 森林の管理	四八二
四 国分郷の森林	四八二
五 森林の保護・育成	四八四
日秀上人 島津久通 調所廣郷	
第三節 商・鉦・工業の推移	四八七
近世の商業 国分地方の商業と林氏	
その他の商業 行商 国分のたばこ商人	
近世の鉦業 近世の工業	
製造業と職人 西目職人	
薬工品・竹製品	

敷根火薬製造所 東敷塩田

第四節 国分平野の川筋直し 四九九

一 広瀬川の流れ 四九九

大昔の国分平野は海だった

広瀬川の流れ

二 川筋直し（新川掘り）の大事 五〇二

大工事の着手 工事のようす

大隅の穀倉地帯

小字に残る国分平野の川跡

第五節 用水路と新田開発 五〇七

松永用水路 平溝 重久溝

宮内原新田用水路 重久中台溝

川原新田用水溝 その他の用水溝

第六節 小村新田の干拓 五三二

干拓事業のはじまり 干拓工事の経過

工事の完成と新田の管理 町人請負新田

小村新田のその後 小村新田は耕作者所有に

小村新田の堤防災害 市成新田の工事

第四章 宗教と教育 五三八

第一節 近世までの宗教の動き 五三八

一	近世までの宗教のあらまし	五三八
	古代の宗教	中世の宗教
		近世の宗教
二	国分の宗教	五四一
	原始人と信仰	神社
		寺院
		民間信仰
三	宗教の弾圧	五四八
	キリスト教禁制	一向宗の弾圧
第二節	郷中教育	五五二
	薩摩藩の郷中教育	清水郷の郷中教育
第五章	幕	五五六
	末	五五六
第一節	幕末の社会	五五六
	化政文化の余波・花は霧島たばこは国分	五五九
第二節	伊能忠敬の国分測量	五五九
第三節	開国と攘夷	五六〇
	ペリーの来航	生麦事件
		薩英戦争
	薩英接近	薩英戦争と国分の武士たち
第四節	敷根火薬製造所	五六七
第五節	長州征伐と清水郷士	五七一
第六節	戊辰の役と国分郷士	五七一

第五編 近代の国分

第一章 明治時代

第一節 明治時代のようす

明治維新と西南戦争 近代化の鹿児島

第二節 明治初年の行政

戸数と人口 常備隊

第三節 秩禄処分

一 秩禄処分のあらまし

鹿児島県の秩禄処分

二 秩禄処分と国分

城下士族と外城士族 金禄公債とその売買

三 秩禄処分と士族授産事業

第四節 地租改正

一 地租改正のあらまし

地租改正の要点

二 鹿児島県地の地租改正

地租改正の過程 西南戦争と地租改正

地租改正の再着手

三 地租改正と国分

五七五

五七七

五七七

五八〇

五八三

五八三

五八五

五九一

五九二

五九二

五九三

五九七

脱落地と訂正願 国分の土地評価等級

地租改正と農民

第五節 西南の役と国分

敗者の歴史 征韓論の諸問題

西南の役の歴史的な重み

国分兵児の戦闘経路

懲役囚（戦犯）となった人々

国分地方での戦闘

薩軍による締めつけ

春山原の薩軍戦死者墓

墓碑銘が語るもの

第六節 明治憲法下の国分の政治

明治憲法制定 国分の政治と市町村制

村の条例・規定の作成

第七節 日清戦争とそのころの国分

日清戦争の経過

明治二十〇三十年のころの入営・応召

国分からの日清戦争従軍

第八節 日露戦争とそのころの国分

日露戦争の経過 国分からの日露戦争従軍

第二章 大正時代

第一節	大正時代のようす	六四九
	大正デモクラシー	
	米騒動と政党内閣	
	大戦後の動き	
第二節	大正時代の国分	六五一
	大正時代の人々の暮らし	
	旧五か村の人口と職業	
	ランプから電灯へ	
	小村（広瀬）の大火事	
第三節	桜島の大噴火	六五八
	桜島噴火の新聞記事	
	大噴火の被害	
	桜島大噴火と国分地方	
	津波が来たどう	
第四節	国分の小作争議	六六二
	一 地租改正と小作農の増加	六六二
	地租に苦しむ農民	
	小作農の増加	
	高い金利と小作農	
	農地を手放す農家	
	国分旧四町村の小作農家数	
	二 明治時代の小作争議	六六七
	小村新田小作争議	
	三 大正時代の小作争議	六六九
	国分三か村の小作争議	

四 昭和の小作争議	六七一
-----------	-----

東襲山村の小作争議

農民リーダー・富吉榮二

第三章 昭和前期（終戦まで）	六七五
----------------	-----

第一節 昭和前期のようす	六七五
--------------	-----

金融恐慌から世界恐慌へ 日本恐慌対策

軍部の台頭

第二節 国分の金融機関	六七七
-------------	-----

恐慌の影響 国分地方の金融機関

旧町村の産業組合 国分生まれの南日本銀行

第三節 日中戦争とその他の国分	六八一
-----------------	-----

日中戦争のあらまし 戦時下の暮らし

第四節 太平洋戦争とその他の国分	六八五
------------------	-----

開戦までの経緯 戦局の拡大と敗退

戦時下の生活 国分海軍航空隊開設

若宮神社付近は軍の施設となる

国分周辺の陸軍部隊

国分高等女学校報国隊

本市出身軍人の地域別戦死者数

第五節 国分海軍航空隊と特攻戦	七〇四
-----------------	-----

国分海軍航空隊（国分第一基地）

沖繩への特攻出撃 国分海軍航空隊特攻出撃戦死者名

特攻隊員の遺書

決戦準備の大防空壕

国民義勇隊員の飛行兵救助

第六節 国分の空襲 七二三

国分の空襲記 府中・松木の空襲

広瀬集落の空襲被害

空襲下の農作業

戦争の残がい、不発弾処理

米軍資料による国分空襲の全容

第七節 終戦直前の国分 七三八

空襲下の基地周辺 掩体壕造り

幻の軍用道路 空軍基地の遺物

避難生活

第四章 選挙 七四五

第一節 封建時代の選挙 七四五

第二節 明治前期の選挙 七四六

一 明治新政府の方針 七四六

まだほど遠い国民の政治参加

二 自由民権運動と三新法 七四七

自由民権運動 三新法の制定

三 戸長制選挙	七四八
---------	-----

四 国分地方の戸長選挙等の変遷	七五〇
-----------------	-----

清水郷の変遷 東襲山郷の変遷

五 政党の結成と県内の動き	七五一
---------------	-----

第三節 明治中期～大正時代の選挙	七五二
------------------	-----

一 郡会議員の選挙	七五二
-----------	-----

二 制限選挙の時代	七五三
-----------	-----

わが国初めての衆議院議員選挙

鹿児島第五区衆議院議員選挙

大正八年の選挙法改正

三 普通選挙への動き	七五七
------------	-----

普選法の概要

第四節 戦時体制下の選挙	七五八
--------------	-----

一 大政翼賛会運動と選挙	七五八
--------------	-----

翼賛選挙運動の展開

第五節 衆議院議員の選挙	七六二
--------------	-----

第六節 県議会議員の選挙	七六三
--------------	-----

第七節 旧五か町村長の選挙	七六五
---------------	-----

第八節 町村会議員の選挙	七六六
--------------	-----

第五章 近代の産業と生活 七六八

第一節 農 業 七六八

一 藩政時代の農業のあらまし 七六八

二 明治前期の国分の農業 七六九

地租改正と農民の暮らし

三 明治中・後期の国分の農業 七七二

農業改良のすすめ 農会と小組合

馬耕の始まりと耕地整理

灌漑用水確保のための努力

日当平用水路 日影平用水路

立山新田への用水路 農家の暮らし

四 大正期の国分の農業 七七九

桜島爆発とその影響

信用販賣購買利用組合の活動

国分の小作争議 耕地整理の普及

五 昭和初期の国分の農業 七八四

開墾と農家の暮らし 弟子丸の水利用溜池

灌漑用毛梨野溜池

灌漑用揚水機 河内用水路

上井井堰（月ノ木井堰）

川内井堰（五ヶ村井堰）

郡山耕地整理と名波地区耕地整理

六 戦時下の国分の農業 七八九

大野原地区の強制的買収

統制経済と農業

野口公民館の資料は語る

奉仕作業 農業団体

七 農業技術の進歩 七九二

肥料 農機具 害虫駆除の対策

八 農産物の移り変わり 七九五

米作 麦作 雑穀類とさつまいも

たばこ その他の作物

九 茶業と養蚕業 八〇〇

国分の茶業 国分の養蚕業

第二節 畜産業 八〇二

一 藩政時代の畜産のあらまし 八〇二

春山野牧

二 戦争と畜産 八〇五

三 国分の種類別畜産のようす 八〇五

馬 牛 豚 鶏 その他の家畜

第三節 林業 八一〇

一	明治時代の林業	八二〇
	林野の払い下げ政策	
	公有地の解消と林政	
	鹿児島県の林政	
	国分の部分山・部一山	
	学校林の設定奨励	
	清水村の払い下げ林野	
二	大正時代の林業	八二五
	林政事情 重久施業森林組合	
	国有林野の払い下げ	
	模範林の設定	
三	昭和時代の林業	八二八
	林政事情 清水村の林業	
	戦争と林業	
四	林道	八三〇
	川内〜口輪野間 県有模範林への道	
	毛梨野〜炭床間 川原〜薄木〜片枝間	
	毛梨野〜芦谷〜川原間	
五	林産物	八三四
	国分地方の林産物	
第四節	商業	八二六

一	明治・大正時代の商業	八二六
	明治中期の国分の物価	
	行商の時代	
	大正初期の商業	
	商工会の始まり	
二	昭和初期の商業	八三三
	消費物品種別購入先と価格	
	東国分村の移出・移入物品等	
三	戦時下の商業	八三五
第五節	工業	八三五
	地域別主工業	
第六節	交通	八四〇
一	道路の発達	八四〇
	国分郷の幹線道路	
	国分地方の県道開通	
	国道の開削	
二	交通機関の発達	八四三
	人力車	
	乗合馬車	
	自転車	
	乗合自動車	
	省営バス	
	鉄道の開通	
三	海上交通（小村港・敷根港）	八五〇
第六章	近代の教育	八五三
第一節	明治前期の教育	八五三

国分郷学問所 学制發布と国分の郷校

学制發布後の国分教育

西南戦争と国分教育

教育令公布と国分教育

学制外の学舎教育

小学校令と国分教育

第二節 明治中・後期の教育

明治中・後期の各小学校の沿革

全体主義・国家主義教育への傾斜

就学の奨励 青藍義塾の教育内容

精華学校の創設 明治後期の就学率向上

国分小学校の敷地譲受願

第三節 大正時代の教育

桜島の爆発と国分教育

郡立実科高等女学校の設立

国分実成女学校の設立

国分の実業補習学校

国分の中等公民学校と青年訓練所の設置

第四節 昭和前期の教育

健児団の結成 青年学校の新設と強化

小学校は国民学校へ 戦時下の子供たち

八七〇

八七八

八八一

年表	国分の学童疎開	八八九
参考文献		九〇五
あとがき		九一一